

# 姫路城を支える東西心柱の考察



郷土史研究  
柳瀬龍吉

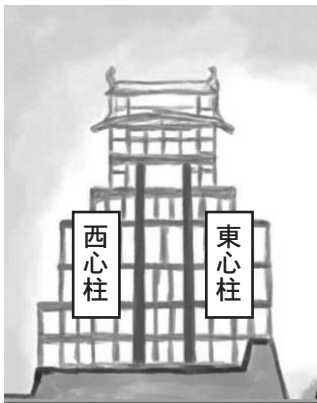
はじめに

「姫路城の東の心柱は、福崎町から出されたことをご存じでしょうか…。」

西播磨文化協会会合で市川町笠形神社のご神木が、姫路城の西心柱に使われている話を紹介する機会があった。その際、福崎町文化協会のある会員さんからいただいたことばだ。そのいきさつを当協会役員の長澤



姫路城



秀人さん、牛尾雅一さんや担当者と一緒に調べることにした。

## 一、姫路城と心柱

羽柴秀吉は中国攻めのため、姫路に城を構えた。しかし三層の天守であつた。

そのあと、池田輝政が現在の五層の天守に作り替えた。輝政は、家康の女婿であり、西のおさえとして姫路城を任された。

彼は岐阜城・三河吉田城の城主の時、震災を経験していたので、耐震構造として二本の柱に全ての加重がかかるようにしていた。一本に約百トンがかかることになる。

その内、西心柱は笠形神社のご神木のヒノキと木曾のヒノキを三階で繋いでいる。

しかし、東心柱はどこから出て、どのように運ばれたか不明のままであつた。

ところが、あるきっかけで、東心柱ではないかと考えられる重要な発見があつた。それは今から約六十年前に当時の大善寺（福崎町大貫）住職であつた棟廣智航さんと長男である照文さんが、寺院に保管されている古文書を整理している時に、姫路城の東心柱に大善寺の木材が使用されたと考えられる文面が見つかった。これが大善寺縁起である。

それを当時の姫路市立図書館長であつた吉識利貞さんに見てもらい、さらに、吉識さんを通じて橋本政次さんへ報告した。

橋本さんは、『姫路城史』全三巻を編集した人で、姫路城に関しては

最高の権威者であつた。

古文書を分析した橋本さんは、これは貴重な資料であると判断した。この内容を神戸新聞が取り上げた結果、多くの人々が関心を持つようになった。

## 二、築城史に新事実

### （大善寺縁起）

橋本さんの調査から、

\*紙質、筆跡、墨蹟から江戸時代前期のものに間違いがない。

\*格調高い漢文で書かれている。

\*当山（大善寺）の木を東心柱に使つた。

\*輝政が三宝荒神（大善寺の裏にある）に帰依していたことがわかつた。

\*巻き物の大きさは、天地三十cm、長さ一m五十cm、一部虫に食われているが判読できる。

\*大善寺が困つているとき、境内から心柱が出て、城主から信頼された。\*もし、姫路城史を改訂することがあれば、大善寺縁起のことを加筆したい。

### 姫路城の心柱 一本、出所わかる 築城史に新事実

大善寺 開基縁起の巻き物から

【神戸新聞】姫路城の東心柱と西心柱の木材の出所が、大善寺の縁起文書から明らかになった。築城史に新事実が加わった。縁起文書には、東心柱の木材が、大善寺の境内から採られたと記されている。また、西心柱の木材は、木曾藩から運ばれたとされている。この発見は、姫路城の歴史を大きく変える可能性がある。築城史の改訂が期待されている。

昭和36年5月10日  
(神戸新聞)



池田輝政像  
鳥取県立博物館所像

### 三、大善寺縁起と心柱

大善寺は

\*所在地 福崎町西大貫

\*創建年 大化元年（六四五年）

\*開基 法道仙人

法道仙人は法華山一乗

寺他四十八ヶ寺を開く

\*宗派 真言宗

慶長十四年（一六〇九年）、当時

大善寺の隆玄住職は姫路城造営にあたり、三宝荒神の神木を東心柱として提供したのをきっかけに輝政と交流が深まった。

大善寺は姫路城から、鬼門の方向にあり、輝政は一字の社「一棟の堂」を建立し鬼門神として祭り料を上納したと縁起に書かれている。

当時姫路城や輝政の周辺に不可解な

事故・事件がたびたび起きた。

例えば、輝政の病状が悪化したり、

枕元に「やまぶし」が現れたり、風もないのに姫山の木がばたばたと倒れたりした。このようなことが続く

ので、ゴマを焚き祈祷させると次第に

静かになり、病状も回復した。（姫路

城史上巻六二八頁）

ただこれだけで、東心柱に使われたことは証明できない。

橋本氏は木の大きさ、輝政と隆玄住職の交流から、ほぼまちがいないだろうと判断している。

### 四、古文書を点検

昨年四月大善寺を関係者と訪ねる。

棟廣照文氏の智子（禅月）夫人に貴重な資料を見せてもらった。

丁寧に保管されていた。時代を

感じられる。大善寺縁起の一部には

「池田輝政公姫路城造営之切佛閣之山林伐○築之時當山有伐採為心柱城郭成就…」(○は不明)

即ち、この山にあった大木を心柱と

することで城が完成した。

「福崎町文化」第一号（昭和六十年三月三十一日発行）に当時の大善

寺住職であった棟廣照文さんがそのいきさつを投稿されている。



照文さんは、「これはあくまで寺側の記述であり、縁起などは概して誇大表現が多い。」と謙遜して書かれている。

しかし、大善寺縁起第二巻目、宝暦縁起には信憑性を感じられる。

それは宝暦十年に当時の藩の碩学であった、好古堂の伊藤蘭齋が草稿し、



大善寺縁起

春日寺玄韻住職によって清書され、姫路公家臣松平孫三郎の文箱におさめられている。

また年四季、大善寺から城内へ十数人を招き大般若転読を行ったと記録されている。（姫路城史下巻二九二頁）

第三者によって草稿され、記述されたことよって、信憑性が高い。

しかし、照文さんは、四百年近く前のことでその木の痕跡が残っていないので確たる証拠がないといわれる。

東心柱は、大きさは全長二十四・八m 直径九十八cmであった。

木の大きさを証明するこんなエピソードが古老から伝わっている。大門に「スエキヤ」と云う屋号の



大きな家があった。この家は心柱の末の木で一軒の家が建ったといわれている。しかし、その後改築され、その時の木が一切残っていない。もし、その時の家の一部が残っていれば、今の心柱とDNA鑑定で心柱が当地から出たことがかなりの高い確率で証明される。「スエキ」で一軒の家が建ったとなれば、相当大きな木であったといえる。

## 五、大善寺由来

寺の玄関の脇に由来が次のよう書かれている。

『当山は雲頂山大善寺と号し、白鳳元年に法道仙人が開祖、宗派は東寺真言宗である。

本尊に薬師如来を祀り、旧本堂・現護摩堂に不動明王、大師堂に弘法大師像、三宝荒神堂に三宝荒神、開祖法道仙人、愛宕大権現を祀る。

慶長十四年（一六〇九年）、池田輝政公の姫路城造営にあたり、三宝荒神の神木を心柱として供出したこと、当寺の位置が城から見て北東・鬼門にあたることなどから、大善寺と



大善寺 由来（玄関にたててある）

姫路藩との関係は密接となる。この時の大善寺住職は隆玄であり翌年、その縁起について記している。

また、寺僧が年三季、城中にて大般若を修法、後の酒井公の代には年四季、大般若を奉修し、城内安泰の祈願を行った。（大善寺記 伊藤蘭齋・洛西沙門玄韻）

また、寺内に「亀大師」とよばれる百八十五センチの弘法大師像があり、昔、篤信者がこの像を背負って四国八十八ヶ所を巡拝したと言われ、大善寺裏山一帯には四国八十八ヶ所のお砂踏み霊場がある。

また、弘法大師入定一一五〇年の記念に建立された仏舍利塔には、唐招提寺からもたらされたという仏舍利

（七粒）が泰安され、阿弥陀如来や西国三十三ヶ所霊場の観音菩薩三十三体（江戸中期）も安置されている。』（原文のまま）

## 六、三宝荒神について

荒神は、火の神であり、台所の神と言われる。一般に災難を除去する神として崇められる。

柳田國男は「阿也都古考」で民間習俗における荒神信仰が各地にあったことを説明している。

この付近の山から出たことになるが、場所は特定できていない。



三宝荒神



姫路城心柱出所の地

## 七、疑問点を検証

◆どのようにして搬出したのでしょうか？  
長さ二十五mもある大きな木をどのようにして運ばれたか記録を探したが見つからない。

ただ、銀の馬車道とほぼ同じコースであったと記されているが、銀の馬車道は明治に入ってからであるのでそのままとは言えない。

おそらく、農閑期に田畑に丸太を敷き詰め、キンマ（木製の運搬用具）をいくつも繋いで多くの人が引っ張ったのではないかと思われる。

◆建築に要した期間と人数は？

輝政が支配したのは、播磨五十二万石、備前二十八万石、淡路六万三千石、合計八十七万三千石の大大名であった。

各地区に人数や資材を割り当てて集めた。延べ人数は五千万人と推定できる。

期間は慶長六年（一六〇一年）から同十四年の短い期間に完成させている。

◆設計図は残っていないか？  
残っていない。しかし何もなしにこれだけの巧妙、美形な建築ができ

るだろうか。考えられることは、模  
型を作りそれに忠実に建てたのでは  
ないかと云う説もある。

◆姫路城内でいくさをしたことがあ  
るか？

城内のあらゆる場所に不落の  
工夫をしている。建築以来、姫路城で  
戦ったことは一度もない。（「姫路  
城の話」橋本政次著）

しかし、城の近くでは何度か戦っ  
ている。

輝政以前の赤松貞範の時、赤松満  
祐の時（山名持豊が攻めてきた時）、  
羽柴秀吉が中国征伐の時など、いず  
れも城で戦っていない。

最後の城主である酒井公の時、景  
福寺から官軍の空砲で威嚇されたが、  
開城を決めていたので、いくさにな  
らなかった。

◆火災はなかったのか？

歴代城主は火災を厳しく戒めた。  
しかし、安永五年（一七七六年）六  
月七日落雷があったが、大事にいた  
らなかった。明治十五年（一八八二  
年）二月一日「リ」櫓を焼失、同年  
十二月二十七日備前丸を焼失した記  
録がある。

◆明治以降の姫路城は？

明治六年一月十四日「廃城令」が  
出された。

兵器の発達で戦術が一変し、今ま  
での城郭は無用の長物になった。

これを保存するには莫大な経費が  
かかる。どこの城も厄介者になって  
次々とつぶされていった。

姫路城も競売にかけられ、入札の  
結果、二十三円五十銭で、姫路市米  
田町の神戸清一郎（かんべせいいち  
ろう）さんが落札した。しかし、解  
体する財力もなく、思案のうちに月  
日が流れた。

明治十一年に陸軍省の管轄になり、  
ついに解体は免れた。しかし、手入  
れをすることなく、風雨にさらされた  
市民のシンボルである姫路城を市民  
から存続を要望する声があがり白鷺  
城保存期成同盟が結成され国へ要望  
した。

これらの力が政府を動かし、明治  
四十三年、四十四年に国費九万円を  
投じて天守の大修理を完了した。大  
正元年（一九一二年）には土地なら  
びに建物を無償で姫路市へ貸し下げ  
られた。

◆姫路の大空襲の時なぜ焼けなかつ  
たか？

昭和二十年七月三日姫路の大空襲が  
あった。当時のアメリカの戦闘員の  
話では「姫路城を意識して爆撃しな  
かったのではないが、一面煙で見え  
なかつた」と言っている。

しかし、城内の数力所に焼夷弾が  
落ちた。天守閣には命中しなかつた。  
戦地から帰ってきた人々が、焼け野  
原の中にそびえたつ姫路城をみてど  
れほど心をふるい立たせたか。復興  
への意気込みが燃え上がったといわ  
れている。

これらの経過を検証した中では、  
東心柱が取り換えられた形跡はない。



復員して姫路駅に降りて最初に  
目についたのは姫路城だった

八、西心柱の取り換えの経緯  
東心柱は補強をしているが、築城  
以降取り換えていない。

一方、西心柱は、昭和の大修理の  
とき、中心まで腐っていたので、こ  
れは取り換えなくてはいけないこと  
になった。

そこで、文部省技官加藤得二さん  
は全国の林業関係者へ直径1m以上  
長さ二十五m以上のヒノキを探して  
ほしいと触れを出した。

早速、数力所から連絡がはいり、  
現場へ出向いて調べた。ところが、  
空洞があつたり、長さが不足してい  
たりと、なかなか見つからなかった。

もつと広範囲に探してみると、意  
外にも姫路から三十数キロのところ  
条件にみあうヒノキがあると情報が  
入った。それは旧瀬加村（現市川  
町）の笠形神社のご神木である。し  
かし、いくら姫路城の心柱とはいえ、  
昔から先祖が大切に守ってきたご神  
木であると、住民の中から、切るこ  
とに「待った」がかかった。城の  
担当者や地元の関係者が住民を説得  
して、何とか測量が許された。

ところが、地上十五mのところ



氏子たちが話し合う

わずかの歪みがあり、諦めざるを得なかった。

振り出しに戻り、考えた末、これだけのヒノキがあるのは、一度も斧が入ったことのない奥木曾にしかないのではと、木曾の営林所に依頼して、雪の中をローラー作戦で探した。

そして、目当ての木は見つかった。太さ、高さともに十分ある。ヒノキは雪解けを待つて百馬力のクレーンでトロッコ道まで持ち出した。注意深く運び、貨物列車の駅まであと数キロのところ、後ろのトロッコが谷底へ「ドスン」と落ち、真二つに折れた。割れ目を見ると、折れてはいるが、半分は十分に使える。



半分は使える

加藤さんが思いついたのは、笠形神社のご神木と、折れた残りの木曾のヒノキをつなぐことである。これで西心柱の改修が実現することとなる。

地元では姫路城の心柱になるのなら、皆で祝おうと云う気運が高まった。昭和三十四年九月十二日にトローラーに乗せられたご神木が道中の村々で止まり、集まった人々に祝い酒をふるまいながら姫路へ向かった。



祝い引き前日  
旧姫路市役所前でまで運ばれる。

翌十三日上牛尾、下牛尾の住民は甘地駅から特別仕立ての五両編成の列車に乗って姫路へ向かった。そして盛大な祝い曳きに参加した。



雨の中の祝い曳き

一旦あきらめた木がふたたびお役にたったのでこの木を「運命の木」と名付けて、兵庫県中学校道徳副読本に、郷土学習資料として取り上げられている。なお、このいきさつをDVDにして多くの人に見てもらっている。また、木曾の木のふるさとである中津川市へも送った。



「運命の木」DVD  
(市川町観光協会にあります)

中津川市では、伊勢神宮、出雲大社などへ材木を送り出すときは、式典をするが、この時はやった記録がないし姫路城の心柱になっていることもほとんどの人が知らなかった。そこで中津川市、姫路市、市川町二市一町の交流を提案し、一昨年市川町文化センターで交流会を盛大に行い、現在も交流は続いている。

今後、東心柱が福崎町から出てくることに関しさらなる資料を見つけ、確かなものになりたい。

福崎町文化協会の会員さん、担当者、その他の皆さんの協力に感謝します。

参考文献

「姫路城史」 橋本政次著

「姫路城の話」 橋本政次著

「兵庫県道徳読本中学校心がつむぐ  
兵庫のきづな心がやく」

兵庫県教育委員会

参考DVD

「紙芝居 運命の木」

市川町観光協会